佐佐木信綱

記念館だより 第37号

目次

・特別展報告（令和4・5年度）
・新資料のご紹介
・講演会レポート（令和4・5年度）
・信綱一首・お知らせ

特別展報告

●令和4年度「信綱の思ひ出づる人々」

開催期間　令和5年1月18日(水)～3月19日(日)

令和元年度の豪雨被害やコロナ禍の影響から、3年ぶりの開催となりました。

佐佐木信綱は、明治5年6月3日、石薬師村に生まれました。同年生まれ年には、樋口一葉、島崎藤村がいます。信綱の生涯を振り返ってみると、信綱の身辺には、常によき先達・よき友・よき後進が集い、多くの人々との交流がみられました。

信綱の自著『明治文学の片影』は、100人の文化人の書簡の写真とその解説から構成されており、『明治大正昭和の人々』では、約250名の人々との交遊を記しています。

令和4年度の特別展では、明治時代に活躍した、学界・芸術界の人々や、「心の花」の門人たち17人との親交のエピソードや、信綱宛に送られた葉書や書簡など、約50点を展示し、信綱の思ひ出づる人々を紹介しました。

自伝著書４冊　右から、佐佐木信綱著『明治文学の片影』、『ある老歌人の思ひ出』、『作歌八十二年』、『明治大正昭和の人々』。

令和4年度特別展の様子

17人は、漢学者依田学海にはじまり、信綱の最初の師である高崎正風、日本画家富岡鉄斎、小説家坪内逍遥、作歌森鷗外、漢詩人森槐南、日本画家寺崎広業、小説家幸田露伴、小説家尾崎紅葉、作歌島崎藤村、歌人樋口一葉、歌人与謝野鉄幹、歌人与謝野晶子、唯一無二の親友の言語学者新村出、信綱と共に英訳万葉集編さん委員でもあった歌人斎藤茂吉、門人の木下利玄、九条武子です。

資料は、信綱が『心の華』を贈ったことに対して、島崎藤村から受けたお礼のはがきや、信綱の門人であった木下利玄が、歌集の校正を催促している内容のはがきなど、信綱との距離感や親交の深さがわかる資料のほか、昭和13年9月25日、紅葉館で行われた『新万葉集』竟宴の集合写真では、太田水穂、北原白秋、窪田空穂、斎藤茂吉、釈迢空（折口信夫）、土岐善麿、前田夕暮、与謝野晶子、尾上柴舟と信綱の審査委員10人らが写っており、当時を代表する歌人が一堂に介した貴重な1枚を展示しました。

また、信綱編『短冊凌寒帖』には、森鷗外の短冊が印刷されたものが収録されており、短冊に書かれた歌は、信綱が鴎外からもらったはがきの短歌を気に入り、短冊に改めて書くように依頼して実現した経緯で書かれたもので、二人の近さを示す資料など、文豪らとの交流を通じて、信綱の幅広い交友関係や偉大さを知ることができたと思います。

信綱一首 37

春の日の
ゆくらゆくらと山一つ
あなたへまるる
太郎冠者かな

明治41年作　歌集『新月』

「春の日の」は「ゆくらゆくらと」にかかる枕詞的用法であるが、意味上では「春の日の」「あなた」ともかかっているとみてよかろう。「ゆくらゆくら」は『万葉集』に用例のある語で、ゆらゆらと、といった意。「あなた」は彼方、あちら、向こう側の意。「太郎冠者」は狂言の登場人物。のんびりとした、牧歌的な心象風景とも見られるが、（中略）人生に対する倦怠を基盤に置いた自己戯画化の歌と解するべきだろう。（引用　佐佐木幸綱著、『佐佐木信綱』桜楓社、１９８２年より）

「春の日の」からはじまる歌は、『佐佐木信綱全集』に七首ある。

お知らせ

●元気な来館者♪

石薬師小学校の2年生の皆さんが、校外学習で記念館を訪れました。昔の本や短冊、信綱が実際に使っていた筆や眼鏡に興味津々で、生涯一万首以上の歌をつくったことにとても驚いていました。信綱の肖像画をみながら絵を描いたり、展示資料を見て質問をしてくれたりと、楽しく学習してくれました。

校外学習の様子

●資料閲覧について

佐佐木信綱記念館所蔵の資料を閲覧の際には、事前予約をお願いいたします。予約は、鈴鹿市文化財課（Tel ０５９－３８２－９０３１）までご連絡ください。

ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和の時代を生きた歌人・国文学者である佐佐木信綱（1872～1963）の遺功を称えるべく、昭和45年（1970）に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年（1986）に「信綱資料館」が併設されて以降は、こちらを中心に展示活動が行われてきました。資料館と生家の隣には、佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども残されており、これらを一体として佐佐木信綱記念館と称しています。かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を展示するほか、市内外への魅力発信に努めています。

佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町1707-3　TEL&FAX 059-374-3140

開館時間　9:00～16:30

休館日　毎週月曜、第3火曜（休日の場合は開館、翌日休館）
年末年始

アクセス　近鉄鈴鹿市駅からC-バス乗車
佐佐木信綱記念館下車徒歩2分
東名阪自動車道
鈴鹿ICから車で約20分

資料館外観

発　行
鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課（鈴鹿市神戸一丁目18-18）
TEL 059-382-9031　FAX 059-382-9071
HP 鈴鹿市文化財ガイド http://suzuka-bunka.jp/

●令和5年度特別展
「歌のこころ・信綱のこころ」

開催期間　令和6年1月17日(水)
～3月17日(日)

歌人、万葉学者、国文学者として、幅広く活躍した佐佐木信綱。

令和5年度の特別展では、**歌人としての信綱**に焦点をあて、歌集の序文にこめた信綱の思いや、歌集刊行に至るまでのエピソード、代表歌をとおして、短歌にこめた信綱の思いを知っていただく機会としました。

展示は、**新派歌人時代、充実期、熱海時代**の3つの時代に分けて構成し、信綱の歌集や自筆資料の掛軸・短冊、信綱の写真など、約40点の資料を、時系列に並べました。時代と共に信綱の歌風がどのように変化していったかを理解していただくと共に、生涯1万首以上を作歌した信綱が伝えたかった「歌のこころ」を探る展示としました。

〈展示構成〉

第1期
新派歌人の時代（25～42歳）
明治29～大正2年
第1歌集『思草』
「游清吟藻」
第2歌集『新月』
「銀の鞭」

第2期
充実期（43歳～73歳）
大正3～昭和19年
第3歌集『常盤木』
第4歌集『豊旗雲』
第5歌集『鶯』
第6歌集『椎の木』
第7歌集『天地人』
第8歌集『瀬の音』

第3期
熱海時代（74歳～92歳）
昭和20～昭和38年
第9歌集『黎明』
第10歌集『山と水と』
「秋の声」
「老松」ほか

※時代分けについては、佐佐木幸綱監修『佐佐木信綱全歌集』（ながらみ書房、2004）の解説を参考にしました。

資料は、信綱が東京時代から熱海時代にかけて、机近くに飾っていたものと同じ版画、安藤広重画「東海道五十三次　石薬師」や、信綱が自賛歌のひとつに挙げている、中国旅行中の洞庭湖で詠んだ**「真白帆によき風みてて月の夜を夜すがら越ゆる洞庭の湖」**の歌が書かれた扇子などを紹介しました。

大正4年に、湯の山を訪れた際に詠んだ歌**「白雲は空に浮べり谷川の石みな石のおのづからなる」**の掛軸はサイズも大きく、原稿などから見る信綱の字とは、また違った印象を感じられたと思います。

そのほか、第3歌集『常盤木』の資料では、信綱が初めて自分で序文を書いた、序文全文6ページをパネル資料として展示しました。自序には**「自分というものに対し、また自分の事業（学問）というものに対する反省」**がかかれており、生涯歌を詠みつづけた信綱の、人間味のある一面を知ることできたと思います。

●特別展図録の配布について

今回展示した資料の図版と解説を掲載した図録を、無料で配布しております。お求めの方は佐佐木信綱記念館へお越しください。

令和5年度特別展の様子

新資料のご紹介

多くの方々の御厚意により、掛軸、書簡、書籍など、多数の御寄贈を賜りました。ご協力賜り、厚く御礼申し上げます。その中から一部をご紹介します。

●弘綱の自筆短冊3枚

資料3　資料2　資料1

王昭君
まひなしに花の姿をうつさせて
うちかた人と成にけるかな　弘綱

明治九とせの春早川清の名簿おくりけるに
廣瀬野は菫ははこの外に又
こと葉の花も今かさくらむ　弘綱

開花
進歩
ほだし縄道の大綱打解て
心のこりのすすむ御代かな　弘綱

寄贈・寄託資料一覧

年月日	種別	点数	寄贈・寄託者	
R4.4.7	掛軸	2	鈴鹿市　個人	寄贈
R4.4.15	掛軸	1	鈴鹿市　個人	寄贈
R4.6.1	書簡ほか	179	滋賀県　個人	寄贈
R4.6.29	すげ笠	1	鈴鹿市　個人	寄贈
R4.10.18	書簡	1	東京都　個人	寄贈
R4.11.4	短冊	1	神奈川県　個人	寄託
R4.11.4	色紙	5	神奈川県　個人	寄託
R5.1.6	書簡	5	東京都　個人	寄贈
R5.1.23	書籍	2	大阪府　㈱弘文社	寄贈
R5.10.27	短冊	69	三重県　個人	寄贈
R6.1.14	百人一首	1	京都府　個人	寄贈

（令和4年4月～令和6年1月時点）

資料1は、王昭君について詠んだ歌。（王昭君は、中国前漢の元帝の宮女。）

資料2は、高倉一紀・龍泉寺由佳編『佐々木弘綱年譜―幕末・維新期歌学派国学者の日記（上・中・下）』（皇學館大學神道研究所、1998～2010年）の上巻に、明治9年2月12日「広瀬清入門」と記述があり、石薬師に住んでいた頃に詠んだ歌と考えられます。

資料3は、資料2と同時期の明治初期に詠まれたとするならば、明治初期の文明開化の時代背景を、「絆（ほだ）し（馬の足をつなぎとめる縄）」に例えて詠んだ歌と考えられます。

講演会レポート

鈴鹿市労働福祉会館において、佐佐木信綱顕彰会様主催による「信綱祭」の一環として、第1部に講演会が開催されました。鈴鹿市文化財課職員の講演のみを抜粋して紹介します。

●令和4年度
「記念館の展示再開について」

開催日　令和4年11月26日(土)

常設展の展示資料について、歌人・国文学者であった、父・弘綱とのエピソードを交えて紹介しました。

加賀・越前を旅したことを記した佐々木弘綱著『加越日記』（明治13年）には、**「信綱講せちす」**とあり、当時9歳くらいの信綱が、弘綱に伴って参加した旅先の歌会で、**講せち（講演）**を行っていたことなど、弘綱が信綱に対して、幼少期から高レベルな教育を施していたことを話しました。

また、『日本歌学全書』全12編（博文館、明治23～24年）の編さんは、大学卒業後の信綱のはじめての仕事で、弘綱とともに手がけたものでした。第8編の校正中に弘綱が永眠したため、それ以降は、信綱の独力で編さんされました。このことは、「万葉集こそは生涯かけて研究すべき理想の歌集である」という信念を持つきっかけになったと話しました。

●令和5年度
「信綱と女流歌人たち」

開催日　令和5年11月11日(土)

多くの女流歌人の育成にあたった、指導者としての信綱について、CNS放送セミナー「信綱と女流歌人たち」のDVDを鑑賞いただき、解説しました。

信綱は、与謝野鉄幹や正岡子規らと共に、明治の短歌革新運動を先導しながら、短歌雑誌「心の花」を創刊し、短歌結社「竹柏会（ちくはくかい）」を結成しました。その中で、女流歌人・柳原白蓮（びゃくれん）、片山廣子、大塚楠緒子（くすおこ）に、信綱の教えがどう関わったのかに触れ、女性にしか詠むことのできない歌の世界観を早くから評価し、彼女たちの夢を応援し続けた信綱の思いについて話しました。